けやきの大木　新潟県

あったてんがの

ある村に、ひとりの庄屋さんがいました。庄屋さんの家の裏には何百年もたつ大きなけやきの木がありました。

ある年のこと、その村では、お米の出来が悪くて、お百姓たちはたいそう困っていました。庄屋さんは、それを気の毒に思って、

「裏のけやきの木でも切って、売ったお金で百姓たちを助けてやろう」と考えました。

庄屋さんは、きこりに頼んで、木の周りを測ったり、高さを測ったりして、明日か明後日には切ってしまおうと決めました。けれども、何百年もたったけやきだから、なごりおしくて、木の下に立って、ながめていました。すると、けやきの木が、

「庄屋どん、庄屋どん」とよびました。

「なんだい」

「二、三日のうちにおれを切ると聞いたが、もう五、六年、切るのを待ってもらいたいのだ。それというのも、この山奥に、三本のけやきの木があって、そのまんなかのけやきが、枝ぶりもいいしすがたもいい。おれは、そのけやきと、行ったり来たりして仲よくしているうちに、子どもができたんだ。去年生まれたばっかりだから、その子が、枝が出てすがたがよくなるまで見ていたい。百姓しゅうの米ぐらいは、おれを切らなくても、なんとかする」

けやきの木は、そういってたのみました。

「そうか、そうか。よくわかった」

庄屋さんは、そう答えたものの、ほんとうだろうかとふしぎに思って、山奥へたずねて行きました。すると、三本のけやきの木があって、まんなかのすがたのいいけやきのそばに、小さなけやきが一本生えていました。庄屋さんは、

「ああ、この木のことだな。子どものかわいいのは、だれでも同じだ」と思いました。そして、裏のけやきの木を切ることはやめました。かわりに、自分のお金やお米をみんなお百姓たちにわけてやりました。

すると、その年はお米がよく実って、お百姓たちも庄屋さんも、大喜びしたそうです。

いきがぽーんとさけた

村上郁再話

資料『赤い聞耳ずきん』水沢謙一／野島出版